貧者のレシピ

——ハナ・モア，チャリティ，環境——

川津雅江

はじめに

対仏戦争中（1793–1815），度重なる凶作に襲われたイギリスでは，食糧や料理の話題が政治的イデオロギーの意味合いを帯びただけではなく，人口増加，消費文化，農業改革，環境破壊，階級格差，貧困救済，道徳，家政，健康などさまざまなトピックと複合的に結びついていた。戦争前年に出されたジェイムズ・ギルレイ（James Gillray）の諷刺画『フランスの自由，イギリスの隷属』（*French Liberty. British Slavery*）では，サンキュロットが自由と税免除を謳歌しながら，生玉葱を食べて飢餓状態であるのに対し，イギリス人代表のジョン・ブル（John Bull）は高い税金で餓死しそうだと不平をこぼしつつ，ローストビーフを食べることができて痛風にかかっている。しかし，数年に渡る冷冬がピークに達した1794年から1795年の冬の大飢饉は，実際に飢え死にするイギリス人が出るかもしれないような深刻な食糧難を招いた。

本論では，1795年の食糧難の時期に焦点を絞り，福音主義的博愛主義者のハナ・モア（Hannah More, 1745–1833）が「チープ・レポジトリ・トラクツ」（"Cheap Repository Tracts," 1795–98）において，食糧難に苦しむ貧民救済のためのチャリティ活動の一つとして，安くてうまくて栄養があるレシピの伝授を提唱したことを取り上げ，そうしたレシピの社会的・経済的・環境的意義を考察する。

食糧難の原因と対処法

モアの作品に目を向ける前にまず，食糧難の原因や対処法など同時代のさまざまな立場からの言説を見ておきたい。

イギリスの人口は18世紀の間に500万から1千万へと急増した（Stuart 400）。そして，世紀後期には産業革命が起こり，農村地域における囲い込み，農村貧困層の都会への移住，工業都市での人口集中などが進み，社会は大きな変化を遂げた。1790年代には，フランス革命を巡る急進派と保守派の論争の対立に加え，対仏戦争が勃発し，長引く戦争で政治的・社会的・経済的不安が蔓延していた。

このような時代において，食糧問題は常に政治の問題だった。自然神学者・功利主義哲学者のウィリアム・ペイリー（William Paley, 1743–1805）は，『道徳・政治哲学の原理』（*The Principles of Moral and Political Philosophy*, 1785）において，政治の主要目的は最大の人口を食べさせることだと唱え，肥沃な農地を放牧地に転換することに寄与した囲い込み政策を批判した。なぜなら，放牧地への転換は，18世紀に起きた肉の消費の増加をまかなうために行われたのであるが，それによって食糧全体の供給量が激減することになったからである。ペイリーは，「10人の生存に十分な肉を供給できる一区画の土地は，穀物，根菜，そして牛乳だと，少なくともその倍の人間を養える」(Paley 2: 383) と見積もったが，博物学者のエラズマス・ダーウィン（Erasmus Darwin, 1731–1802）も，1795年の飢饉後に出版した『ズーノミア—有機体生命の法則』（*Zoonomia; or, The Laws of Organic Life*, 1794–96）の第二巻（1796）において，「直径5マイル圏は牧畜の状態では約500人を養うが，農業の状態では何千人もの人を養うだろう」（Darwin 2: 670）と予測した。そして，「牧畜よりも農業による方が食べ物の産出が多いのは，動物の肉で養われる国は野菜で養われる国よりも少ないことを示す。従って，もし両者が戦争したら，アベルがカインに殺されたように，前者は後者に負けがちである。これこそがおそらく耕作可能な広々とした土地を囲い込むことに対する唯一の正当な反論である」と強調しただけではなく，牧畜が「社会の階級の不平等」をもたらしていると指摘した（2: 670）。こうした

囲い込み政策批判は，P・B・シェリー（P. B. Shelley, 1792–1822）をはじめとするロマン主義時代の急進的な菜食主義者らに共通する考えである。シェリーは『自然食擁護』（*A Vindication of Natural Diet*, 1813）において，肉食ができる富者と菜食すら十分でなく飢えに苦しむ貧者との間の経済・食糧格差も指摘した（Shelley 20）。

1795年に深刻な食糧難に襲われたのもまさに貧者だけだった。1795年春から1796年の春まで，イングランド各地で彼らは主食の小麦粉で作った「白いパン」を求めて食糧暴動を起こし，パン屋や製粉所や運搬者を襲った。これまでも飢饉の度毎に食糧暴動が起きていたが，今回の暴動がかつてないほど支配者階級に不安と恐怖をかきたてたのはフランス革命期だったからである。ロジャー・ウェルズ（Roger Wells）が論じているように，「白いパンは，模様がプリントされた綿の服のように，貧者を富者の消費者保護的独占権に異議申し立てすることを可能にした」（Wells 16–17）。そして急進派たちは新聞やパンフレットなどのメディアを用いて，しばしば食糧難と対仏戦争を結びつけながら，貧者の食べ物の要求を貧者の権利と融合した。

たとえば，匿名作家の「貧者の友人」（A Friend of the Poor）は，エドマンド・バーク（Edmund Burke, 1792–97）が貧困労働者を指すのに使った悪名高い表現「豚のような大衆」（"the swinish multitude"）（Burke, *Reflections* 117）を逆手にとったタイトルのパンフレット『豚の権利—貧者への呼びかけ』（*Rights of Swine. An Address to the Poor*, 1794）で，「何千人もの正直で勤勉な人々がパン不足で文字通り飢えている」のは，「おえら方」が戦争を推進するために家賃や地代や食品価格を上げるのに，貧者の「賃金」を据え置いているからだと批判した（*Rights of Swine* [1794] 1–2）。つまり，「貧者の現在のパン不足」は「穀物不足」によるのではなく，「労賃をはるかに超えるパン価格」のせいなのである（2）。「寡婦，孤児ら」がしばしば餓死しているときに，「横柄な貴族たち」が「大晩餐会」を催しているように，この国には食糧は十分ある（3）。従って，この食と経済の不均衡を是正するためには，貧者は「普通選挙権」を要求し，貧者の代表の議員を選出するようにしなければならないと，「貧者の友人」は訴えた（4）。このパンフレットは，1795年頃に別の版としても出版された。それはタイト

ルに定冠詞をつけ加え，エピグラフとしてジョージ・ステップニー（George Stepney, 1663–1707）の英訳によるユウェナリス（Juvenal）の諷刺からの詩行も加えたものである。本文の内容はほとんど同じだが，たとえば，「貧者の現在のパン不足」（[1794] 2）を，「貧者の現在のパンと肉屋の肉の不足」（[c. 1795] 2）に変えるなど若干の修正が施され，食糧不足のさらなる拡大のもとでの貧者の普通選挙権獲得の必要性を訴えた。

また，ユニテリアン派の急進的な社会改革者ウィリアム・フレンド（William Frend, 1757–1851）は，1795年7月15日に下院議員ウィリアム・デヴェインズ（William Devaynes, 1730–1809）に宛てた請願書『パン不足—この食品の高価格の減少案』（*Scarcity of Bread. A Plan for Reducing the High Price of This Article*, 1795）において，戦争が食糧難の「主たる原因」であると断定した（Frend 2）。フレンドによれば，戦争により，莫大な量の小麦が海外に派遣された兵士に送られるとともに，アメリカやポーランドからの小麦の「通常の供給」も途絶えた（3）。そして，戦争に関連して税金も上がったため，「パン」だけではなく「チーズ，ビール，クツ，石けん，ロウソク」など多くの生活必需品も価格が高騰し，貧者は買うことができない状態に陥ったのである（7）。そこでフレンドは，生活必需品の「税金の即時廃止」を求めた（8）。

このように食糧難は囲い込み政策，戦争，食品価格の高騰，低賃金，高い税金など人的要因によって発現したとする見方は，社会改革を求める声と重なっていた。これに対し，政府は食糧難は自然的要因（悪天候による飢饉）によってもたらされたと主張し，次の収穫時になれば食糧難は解消し物価も下がるので，それまで数ヶ月我慢すればよいという方針を立てた。つまり，食糧難で一番問題になったのは主食のパンの原料となる小麦粉不足だったため，かつらにふりかける小麦粉の消費を抑えるために髪粉税をかけたり，パンの質と量を厳しく規制してきた度量衡法を緩和し，小麦にオート麦，ライ麦，ジャガイモ，大麦を混ぜた，いわゆる「混合パン」（mixed bread）の販売を許可したりするなどの対策を講じたのである。そして1795年7月4日，農務省は全国に「現在の食糧難に関して」（"On the Present Scarcity of Provisions"）と題したビラを配布し，次の収穫までの一時的な食糧難を乗り切る具体的な対処方法を5つ提示

した。それは，Ⅰ．パンは小麦粉ではなくすべての穀物で作ること，Ⅱ．パンの消費を減らすためにもっと野菜，肉，魚を食べること，Ⅱ．家畜にやる穀物の量を減らすこと，Ⅳ．小麦粉に他の穀物やジャガイモを混ぜた混合パンを食べること，そしてⅤ．教区や金持ちは貧者のために生活必需品の費用を補助すること，である（Board of Agriculture 579–81）。

ギルレイは農務省のビラにすぐさま反応し，1795年7月6日に『パンの代替物をジョン・ブルに与える英国の肉屋』（*The British Butcher, Supplying John Bull with a Substitute for Bread*）を発表した。この諷刺画では，肉屋に扮した首相のウィリアム・ピット（William Pitt, 1759–1806）がお腹をすかせてがりがりの庶民ジョン・ブルに，パンの代替物として羊肉（マトン）の足を差し出している。当時，羊肉や牛肉は貧しい労働者には手が届かない高級品だった。巨大なまな板の側面に張られた紙によれば，「職人の賃金」が週12～17シリングであるに対し，羊肉や牛肉は1ポンドあたり10.5～12ペンス，1クォーターン［4ポンド］のパン塊は12ペンスである。にもかかわらず，タイトルの下には肉屋のピットがジョン・ブルに対して以下の的外れのアドヴァイスをしたことが記される。「パンはとても高いので（そして君は食べねばならないと言うので），その費用を節約するために，君は肉を食べて生きねばならない。そして1クォーターンのパンに12ペンス払うことができないので，1クラウン［60ペンス］の肉を手に入れたまえ。それはパンの代わりに役立つだろう。」

ギルレイの1795年12月24日の『パンの代替物，あるいはパンを節約し，魚を分け合っている大臣たち』（*Substitutes for Bread; -or- Right Honorables, Saving the Loaves, & Dividing the Fishes*）も，政府の食糧難対策を諷刺した作品である。窓の外でお腹をすかせた群衆がデモをしている最中に，ピットと4人の大臣たちは金貨でできた魚を食べ，ワインを楽しんでいる。群衆が持つパンに付けられた巻紙には前述の絵の中の値段よりも値上がりした数字の「1クォーターン14ペンス」が記され，二枚のプラカードには「飢えに苦しむ豚からの請願」と「あなた方のテーブルから落ちたパンくずを私たちにください」の文字が刻まれているが，ピットたちのテーブルにはパンはない。また，テーブルの正面におかれた一つの袋には，あたかもピットたちのごちそうが貧者の税金でまかなわれていることを示すかのように，「ジョン・ブルの財産に対する新しい税金の産物」と記され，その上に「チャリティで与えられるジャガイモパン」と記した籠が

載っている。壁の一枚のポスターには,「パンの代替物として鹿肉,ローストビーフ,家きん類,かめのスープ,魚,(中略)などなど」のごちそうの名前,もう一枚のポスターには,「切迫した飢饉から目をそらすための全国的な断食の布告」とある。「全国的な断食」とは,対仏戦争中,イギリス軍への神の加護を祈るために国王が1793年4月19日以来何度か布告したものである。これはいかに富者が貧者の窮状に思いが及ばなかったかを暗示する。

実際,バークは1795年11月にピットに提出した『食糧難に関する意見と詳説』(*Thoughts and Details on Scarcity*)において,「労働者たちが貧乏なのは,数が多いからである」と言い,「金持ちがのどを切られたとしても,その階級の者は少ないので,彼らが一年で消費するものを配給しても,労働者の一夜の夕食のちょっとしたパンやチーズにもならないであろう」と,急進派が求めるように富や食糧を再配分しても貧困状態は改善されないだろうと主張した(Burke, *Thoughts* 2–3)。さらに,バークは政府が食糧難に対して介入することすら反対し,すべては供給と需要の市場経済にまかせておけばよいと主張した。飢饉の年と豊年は短いサイクルで交互にやってくるのではなく,非常に長いサイクルで不規則にやってくるので,凶作は来年以降も続くだろう。この災いを防ぐ手立てはなく,貧者に「必需品」をしばらくの間与えずにおくのは「神の摂理」なのである(32)。そして,「商業の法」たる市場は「自然の法」,すなわち「神の法」として機能しているので,その結果を避けたり,緩和しようとすることは無駄であるから,そのまま放任しておけばよいのだ(32)。

こうしたバークの無干渉主義(レッセ・フェール)は,『人口論』(*An Essay on the Principle of Population*, 1798)のトマス・ロバート・マルサス(Thomas Robert Malthus, 1766–1834)を予知するものである(Poynter 53; Stuart 407–08)。マルサスは,人口の幾何級数的割合の増加と食糧の算術的割合の増加の不均衡は「戦争,悪疫,自然災害」(Malthus 109)などの積極的阻止と出生率を下げる予防的阻止によって解消されるので,自然のまま放っておけばよいと主張した(18, 34)。また,「すべての者が自然の収穫物を等しく分け前をもらうことはできない」(179)と階級差を認めるとともに,金持ちの寄付金で貧者が肉を買うと市場は肉不足になり,値段が上昇して結局貧者は買うことができなくなるし(75–76),救貧法の支援

を期待して貧者は結婚し子をつくるので，結局食糧不足になる（83–87）と，貧者への私的および公的支援に対しても反対を唱えた。

半分のパンでもないよりはまし

それでは，ハナ・モアは食糧難をどのように考えていたのだろうか。モアはしばしば急進的な女性作家の旗手メアリ・ウルストンクラフト（Mary Wollstonecraft, 1759–97）に対し保守的な女性作家の旗手として分類されているが，食糧難の言説では保守派と急進派の二分法では割り切れない曖昧な様相を見せる。

チープ・レポジトリの一つ『暴動，あるいは，半分のパンでもないよりはまし—ジャック・アンヴィルとトム・ホッドの会話』（*The Riot; or, Half a Loaf is Better than No Bread. In a Dialogue between Jack Anvil and Tom Hod*, 1795）では，政府よりの典型的な保守的思想を示す。副題中のジャック・アンヴィルとトム・ホッドは，モアが「ウィル・チップ」（Will Chip）の偽名で出版した『村の政治—英国のすべての職工，職人，そして日雇い労働者への呼びかけ』（*Village Politics: Addressed to All the Mechanics, Journeymen, and Day Labourers, in Great Britain*, 1792）の登場人物の名前で，同じ政治的思想の持ち主である。モアはロンドン主教のビールビー・ポーティアス（Beilby Porteus, 1731–1808）に，「もし〔あなたが〕一般大衆の騒動を鎮めるために微力を尽くさないなら，死の床で後悔することになるだろう」（Chatterton 1: 287）と勧められて，『村の政治』を書いたが，『暴動』も同じ目的を持つ。『村の政治』でトマス・ペイン（Thomas Pain, 1737–1809）の急進的な思想にかぶれて自由と人間の権利を求めたトムは，1795年の食糧難の年に出版されたこのバラッドでは，「お腹がすいたのに食べる物がほとんどない」，「だから製粉所を壊そう。また肉をすべて没収しよう」と，村人たちを煽動して「暴動」を起こそうとする。

これに対し，保守的なジャックは，食糧難は戦争のせいでも税金が高いせいでもなく，天候（すなわち神）のせいであり，「国王」も「議会」も天気を変えることはできないと力説する。しかし次の収穫が近いのだから，「辛抱強く

待てば，値段も下がるだろう。」暴動を起こしたら，まったくパンを家にもっていくことができなくなるが，働いたら「少し」は買うことができるはずだ。また現在の「困窮」は神によって「あらゆる不満を罰し，私たちからそれを取り除くために」もたらされたものであるから，私たちはその現状を受け入れ，自分たちに今できること，すなわち「一日中働き，日曜には／教会で1週間の必需品をもらうやり方を尋ねよう」と言う。そして「紳士たちも私たちに金銭的な援助をする余裕があるだろう。／彼らは寄付してくれるだろう—そしてプディングやパイを食べるのをやめるだろう」と，金銭や食べ物などの物質的援助を施す温情主義的（パターナリスティック）なチャリティを期待する。

このように，ジャックは貧しい労働者がこの食糧難を乗り切る方法は諦念と労働とチャリティへの依存であって，暴動ではないと説く。トムは結局説得されて，暴動を起こすのを止め，仕事にでかける。実際，このバラッドはバースの暴動を止めたと言われている（Elliot 183）。

家庭管理（エコノミー）の欠如

しかしながら，モアは食糧難の原因をジャックのいうように天候すなわち神だけであるとは考えていなかった。1795年8月14日のブーヴェリ夫人（Mrs. Bouverie）宛の手紙では，『暴動』について言及したとき，次のようにそれ以外の原因の可能性を仄めかしている。「私はロンドン主教に，国内の治安を維持するために，私の良心が許す限り，食糧難の二次的・副次的な諸原因を隠すでしょうと伝えました。実際，その主たる原因は厳しい季節が続いていることであると言うとき，私は自分が事実と見なしていることを言いました。全体の事実を言うことなく事実を言うのは詭弁でなければよいのですが」（Chatterton 1: 287）。

食糧難の「二次的・副次的諸原因」は，1795年9月に出版されたチープ・レポジトリの『豊かさへの道』（*The Way to Plenty*）において明らかにされる。同作品は，怠け者の御者が立派な農場主に成長する様を描いた『騎乗御者トム・ホワイトの物語』（*The History of Tom White, the Postilion*, 1795）の続編である。

1795年の食糧難を巡る八つのエピソードからなり，主として中流階級のチャリティの側から食糧難を描く。その目的は，1795年8月24日付けのグロスター公爵夫人（Duchess of Gloucester）宛のモアの手紙によれば，「一般民衆に，彼らの極貧は時代の悪さというよりも彼ら自身のeconomyの完全な欠如が原因であるということを納得させること」（Roberts 1: 481）だった。

economyの語源は古代ギリシャのオイコノミア（「家」を意味するオイコスと「管理」を意味するノモスの合成語）である。18世紀には，国家の財源を管理する「政治経済学」（political economy）（*OED* 3）のような現代的な意味の他に，「特に家計に関して家庭を管理する技もしくは学問」あるいは「家政（学）」（domestic economy）（*OED* I. 1. a.），そして，「構成」（*OED* IV. 8）の意味として，economy of nature（*OED* IV. 8. c.）（『リーダーズ英和辞典』では「自然界の秩序」，「自然の経済」と和訳されている）や「人間の社会全体や特定の共同体組織」（*OED* IV. 8. d）もあった。

モアが上述の手紙の中で言及しているeconomyは，「家庭管理」の意味で使われている。つまり，モアは食糧難は貧者自身の家庭管理のまずさに起因すると言うのである。『豊かさへの道』の中では，「家庭管理の完全な欠如」は「やりくりのまずさ（BAD MANAGEMENT）」（More, *Way* 24）として言及されている。

こうした言い方は，バークの無干渉主義と同じく，貧者に冷たいと聞こえるかもしれない。しかし，モアはバークと違って貧者を突き放したりはせずに，正しい家庭管理を教えることによって貧者を食糧難から救済しようとした。その救済方法は，温情主義的（パターナリスティック）なチャリティから，貧者の自助（self-help）を促すチャリティへの移行を示している（Comitini 1–4）。

貧者のレシピ

『豊かさへの道』では，チャリティの担い手の中流階級自身が上手な家庭管理の模範である。「厳しい冬」（"The Hard Winter"）のエピソードは1795年の極寒の冬のときに，農場主のホワイト夫妻が貧者に援助するために，それぞれいかに家庭のやりくりをしているかを描く。ホワイト夫人は，「飼い豚の数を

減らして，貧困家庭を助けるためにもっと乳清とスキムミルクを手に入れ」(More, *Way* 16)，冬の間，肉は煮たものだけを食べて（つまりイギリスの国民食と言われるローストビーフのように肉を焼く料理ではなく），その煮汁でブロス［肉や魚を煮出して作ったスープ］」を作ってそれを「病気の貧者」にやり，春になって食糧難がもっと悪化すると，「ケーキ，パイ，あるいはプディング」をまったく食べなかった（17）。

一方，ホワイト氏は小麦だけではなくライ麦，大麦，果物も不作となることがわかったとき，「穀物も不足する場合」に備えて，他の農場主たちに農地の隅でジャガイモを栽培するよう呼びかけたり，自分たちのところで働く労働者たちに自分たちの枕地（まくらち）［畑の端に沿って耕さずにおいた一条の土地］や荒れ地でジャガイモを植えることを許したり，収穫した穀物を違法に輸出したりせずに，近隣の貧者に市場より安く売ったり，多くの人間が必要としている肉や牛乳をやらなくてすむように猟犬を手放したりした（18–19）。

「白いパン」（“The White Loaf”）のエピソードでは，7月中旬に，郡行政官から送られてきた「公式な布告」（前述の白いパンを食べることを控えるようにという政府の方針を指す）を，教区司祭のドクター・シェパード（Dr. Shepherd）が教区の住民の前で読み上げ（20），「教区の会合」（“The Parish Meeting”）のエピソードでは，ホワイト夫人の助けを借りて，貧困女性たちの家庭管理指導に乗り出す様が描かれる。ドクター・シェパードは，教区の貧しい女性たちに向かって，「あなた方の現在の困窮の半分はやりくりのまずさによっている」（24）と指摘する。彼女たちは，子どもたちがクツも靴下もはかずに裸足なのに，「真っ白なパンの大きな塊」を一日に3回も食べさせているが，「その半分の量のパンを，粗末なパンならもっと少ない量を，玉葱やリーキのポリッジに入れれば，美味しい朝ご飯になるだろう」（24）。また「一番貧しい者たちですら多くの者が焼きたてのパンを食べているが，それは一つ［の値段］で［焼きたてでないパン］五つ分の差を生み出す」（24）と言って，いかに彼女たちが家庭管理が下手であるかを説いた。そして，家庭管理が上手なホワイト夫人に貧しい家庭に適した「美味しいレシピ」（29）を教区の貧しい女性たちに伝授してくれるよう頼む。それらはパンや小麦粉不用のレシピで，たとえば，エンドウ

豆と玉葱にほんのちょっと下級品の牛肉，羊の頭などを入れて，残りは自宅の庭に生えているキャベツ，カブ，人参を入れて二，三時間ことこと煮たスープについて，ホワイト夫人は「労働者は肉を食べるべきだが，子どもたちは必要ない，このスープは濃厚でたっぷりと量があって，パンがいらない」(26) と薦める。また，スキムミルクとライスにほんの少しのオールスパイスとブラウンシュガーを入れて煮た「ライスミルク」(26-27)，スキムミルクとライスとブラウンシュガーで作る「ライスプディング」(27-28) もパン不用の料理である。パンの代替物として当時最も薦められたジャガイモ料理としては，スライスしたジャガイモと玉葱に，羊肉の胸の骨を一，二本か塩漬け豚肉のスライスを加えて一緒に蒸した料理 (29) や二，三匹の酢漬けのニシンをジャガイモと一緒にかまどで焼く料理が紹介された (30)。前者の蒸し料理は，話しているホワイト夫人もよだれが垂れそうになり，聞いていたドクター・シェパードの食欲も刺激し，自分の家でもその料理を食べる気にさせた美味しい料理であるという (29)。

ドクター・シェパードは，こうした貧者のためのレシピを書きとめて普及につとめ，またホワイト氏に協力してもらって食材のライスのための「新たな寄付」を募り，「大酒飲み，賭博者，安息日を破る者」，そして「暴動」を起こす者以外のすべてに分配すると約束した (31，33)。そして，さらにベッティ・プレイン (Betty Plane) という名の貧しい女から，金持ちが肉のスープ用にたくさんの肉を買ってしまうので，肉屋が私たちに屑肉も売ってくれないと訴えられると，これからは肉のスープではなく，「健康的で，もっと美味しい」野菜スープを飲む，金持ちの御夫人(レディ)にもそうしてもらう，そして極上の肉だけ買い，肉屋に屑肉の値段を下げてもらうとも約束した (32-33)。

こうしてモアは，『豊かさへの道』で，食糧難は工夫次第で乗り切れるものだと主張した。貧しい女性たちがホワイト夫人のように有能な家庭の管理者あるいは賢い消費者になれば，家の外で暴動が起こることもなくなり，白いパンの代替物の代表であるジャガイモに対する偏見もなくすことができるかもしれない。偏見というのは，小麦が育つ豊穣な土地よりも不毛な土地で栽培することができるジャガイモは，18世紀にはアイルランドの必需食品だったが，イ

ングランドでは「豚だけに適している」(Teuteberg and Flandrin 444) として見なされていたからである。

エコシステムとしての共同体

ここで注目すべきは,『豊かさへの道』における家庭管理は経済的(エコノミカル)であるだけではなく,エコロジカルでもあるということである。ecologyはeconomyと同じ語源のオイコスから生まれた語で,もともと有機体と環境の関係を研究する生態学の意味だったが,近年では環境思想や環境活動全般を指す語として使われている。本論がここでエコロジカルと言っているのは,先に参照したeconomy of natureにも関連のあるエコシステムの考えがここにあるからだ。つまり,一つの教区を一つの家,すなわち相互に依存して生きる生物共同体の住処として見なし,その構成メンバー間で,有限な食糧をいかに無駄なく分配すれば,共同体を維持できるかということが常に念頭におかれているのだ。共同体の有限な土地ですら,枕地(まくらち)や小麦の耕作に適さない荒れ地にジャガイモを植えて最大限の量の食糧を確保するために無駄使いされていない。この教区はいわばwastes(ゴミ,残り物,無駄)のない,共栄共存の生物共同体なのである。

生物共同体のメンバーは人間だけではなく動物も含む。ホワイト氏は食糧難の時期に人間の食べ物を食べる犬を手放したが,他の教区民にも犬を飼うことを禁じた(31)。人間の食べ物を優先すべきであるという考えは当時の動物愛護の言説においてもしばしば見られる。たとえば,児童文学者・博愛主義者のサラ・トリマー(Sarah Trimmer, 1741–1810)の『寓話的物語』(*Fabulous Histories*, 1786)では,ベンソン夫人(Mrs. Benson)は子どもたちに,動物に優しくしなければいけないが,食べ物がなくて困っている人がいるときには,人間の食べ物を動物に与えてはいけないと教えた。だから,鳥にやる餌は,大きなパンをわざわざ切ったものではなく,テーブルの上におちたパン屑(つまり,ゴミ)でなければならなかった(Trimmer, *Fabulous* 5)。こうした配慮は,キリスト教的な神から人間,動物へと降りてくる存在のヒエラルキーの維持のためである。

『豊かさへの道』では,人間界内部の社会的ヒエラルキーも明確である。ホ

ワイト夫人が自分は煮た肉を食べ，貧者にはその煮汁を施すというのは，現代からみたら，とてもチャリティには思えないかもしれない。しかし，貧者には富者の食べているものではなく，その残り物（wastes）を与えるのはヒエラルキー存続のためには必要なことなのである。

一方，ドクター・シェパードはホワイト夫人のレシピに食欲をかきたてられ自宅でもその料理を作ると言っているが，こうした論法，すなわち，富者も同じ料理を食べている，あるいはそれを知ったら必ず食べるだろうと示唆することにより，貧者に富者のやり方を真似るように促し，現状に満足させようとするのは当時の救貧言説の常套手段だった。たとえば，ロンドン警察裁判所の有給治安判事パトリック・カフーン（Patrick Colquhoun, 1745–1820）も，『労働者の安楽と礼儀正しい主婦に好適な有益な提言』（*Useful Suggestions Favourable to the Comforts of the Labouring People and to Decent Housekeepers*, 1795）の中で，パンの代替案としてスープを勧めたとき，スープは「現在ですら，上流階級以外一般に普及していない料理法」，「貧困者たちにこれまで知られていなかった非常に栄養が高く，美味で，心身を癒す食べ物」，「濃厚で滋養分の多いスープの一番上等で，一番安い料理法は，ロンドンの上流階級の人々だけに知られている」などと，何度も富者の食べ物であることを強調した（Colquhoun, *Useful* 3–4）。確かに富者が食べるコース料理にスープは含まれるけれども，カフーンはそのスープと貧者のスープが同じレシピであるとはどこにも書いていない。

モアの作品でも，本当に富者が貧者のためのレシピの料理を食べているかどうかは不問に付された。その上，ドクター・シェパードが今後肉のスープではなく野菜スープで我慢するにしても，おそらく彼の食卓にはローストビーフなどのごちそうが相変わらず並んでいるだろう。しかし，富者が上等の肉を買い贅沢な食事をするからこそ，貧者は肉を安く手に入れることができるのだ。限られた食糧は，自然のエコシステムでは食物連鎖の上位の者からだが，社会のエコシステムでは地位や金のある者から先に配分され，残り物（wastes）が下位の階級に回される。これは一見ひどいシステムのように感じられる。しかし，21世紀の現代に起こっている地球規模の食の分配の不均等の問題や，もっと身近な食の問題としてコンビニでの賞味期限切れの弁当の廃棄などに置き換え

て考えれば，残り物を利用せずに廃棄することの方がいかにエコロジカルでないかがわかるであろう。

持続可能なチャリティ

チープ・レポジトリは1796年3月までにイギリス全土で200万部以上販売されたと推定されている（Saunders 6）。ホワイト夫人の貧者のためのレシピはそれに従い全国に普及していった。モアの『コテッジの料理人，あるいはジョーンズ夫人の廉価な料理—少ないお金で多くの善をなす方法の指南書』（*The Cottage Cook; or, Mrs Jone's Cheap Dishes; Shewing the Way to Do Much Good with Little Money*, [1795]）は，それとインターテクスチャリティの関係がある。物語の時期は，「小麦がそんなにも高くなくなった」（More, *Cottage* 5）頃であるから，おそらく1795年の収穫時以後であろう。破産した大商人の夫を最近亡くし，小さな村に引きこもったジョーンズ夫人（Mrs. Jones）は，牧師のシンプソン氏（Mr. Simpson）に促されて，お金を使わずに「時間，才能，好意」（3）を使って貧者を救済するチャリティに励む。

彼女は，治安判事の郷士に訴えて，パンの大きさをごまかしていたパン屋の不正をたださせたり，休息日の日曜日にも開いている店に罰金をかけさせたりした。また，貧者が安い肉でスープを作れるように，教区の中で金持ちの「サー・ジョン，郷士，外科医，弁護士，執事」にかけあい，高い肉だけを買うという同意を取り付けたので，この教区では「肉（グレービー）のスープは非常に不人気になった」（8–9）。貧しい女性たちには，男たちが酒場に行かずに家で飲むようにするために家でビールを醸造させるとともに，その酵母を使って「黒パン」（brown bread）（混合パンのこと）の生地をつくらせ，そして金持ちに助言して建ててもらった「大きな教区のかまど」でそのパン生地を，「大きさに合わせて半ペニーか1ペニー」で，焼かせた（11–12）。また貧者の病気の子どもたちのために，教区の小売店主のスパーク夫人（Mrs. Sparks）にかけあって雌牛を飼わせ，牛乳を半ペニーで売らせた。店ではライスも低料金で売られていたので，貧しい者たちは「牛乳と共同のかまどの助けを借りて，上等のライスプディングを僅

かな金額で食べることができるようになった」(12)。

ジョーンズ夫人はさらに教区の「女子学校」で毎週金曜日に，女性たちに服のつくり方，繕い方，洗い方，アイロンのかけ方や，ホワイト夫人の「安い料理の調理法」(12) やそれに感化されて自分たちでも考案した料理 (13) を教え，女性たちが自分の家で調理するようにした。ジョーンズ夫人はそこで作った料理の一部を自分の夕食用に持って帰り，「残ったものをそれぞれ順番に与える」(14)。そうすることで,「貧者には何でも十分いいのだと私たちが思っている」という貧者の誤解を説くことができた (14)。自分の夕食で「残ったもの」を与えるということは前に指摘したように，社会的エコシステム内のヒエラルキーを持続可能にするものであるが，その反面，同じものを食べていると貧者に思わせることで，不満や不平等感を抑え，ひいては暴動を防ぐことができる行為である。たまたま女子学校を訪問した郷士もそこで作られていたスープが「サー・ジョンのフランス人料理人が作ったのと同じくらい美味しそうな匂いがする」(13) と褒め, 自分も食べてみて美味しかったので, (おそらくそのスープの出しに羊の頭を使っていたから)「もう二度と羊の頭を犬にやらない」と宣言し，自宅の料理人のためにそのレシピを所望した (14)。貧者のための料理が富者の食卓にも並ぶとなれば，平等を求めて暴動が起きることはないだろう。

巻末には三つのレシピ（いずれも，細かく刻んだ牛肉もしくは羊肉，豚肉を玉葱，豆，ジャガイモ，人参などと一緒に長時間煮て，最後にオートミールでとろみをつけ，塩こしょうした料理）と，「別のレシピ」として，ホワイト夫人のニシンとジャガイモの焼き料理と，スパーク夫人が毎週土曜日に店で売る牛のほお肉をジャガイモ，玉葱，その他の野菜を入れて煮込み，塩こしょうしたスープが紹介される (15–16)。いずれのレシピも野菜だけの料理ではなく，ひき肉や魚が入っていることに注目したい。シェリーのような急進的な菜食主義者が富の不平等を解消するために求めた食の改革，すなわち黄金時代の食である菜食とは一線を画し，ほんの少しの肉や肉の味があれば，貧者にその定位置で満足感を味わわせることができるのだ。

そして最後に「役立つヒント」として，『豊かさへの道』でも言及された家庭管理が箇条書きに記される。すなわち，焼きたてパンと古くなったパンの違

いは［同じ値段で］前者が一つに対し，後者は五つの量があること，肉を焼くよりもブロスにした方がはるかに食べでがあること，庭を最大限に利用すれば，リーキや玉葱を少し使うだけで料理を安くて美味しくすることができること，バターよりも肉を買えば，貧しい家庭はもっと食べることができること，家でビールを醸造すれば，妻はもっと食べられるし，夫も喜ぶし，二人とも健康になること，安くて無駄にならないカワ麦，ライス，乾燥豆，オートミール，そしてこしょうとショウガを常備しておくこと，借金を返し，神につかえ，隣人を愛することである（16）。

これらの「ヒント」はチャリティの受け手の貧者に向けられたものである。しかし，モアはチャリティの与え手の富者も「家庭管理（エコノミー）」の改善が必要であると考えた。1795年8月にチープ・レポジトリの「日曜日の読み物」として出版された『あらゆる階級の人々への手引き』（*Hints to All Ranks of People*, 1795）では，「現在の食糧難」は，「少しでもむだにならないように，パンくずのあまりを集めなさい」（ヨハネによる福音書6.12）というイエスの「家庭管理（エコノミー）のレッスン」（More, *Hints* 15）に従って，それぞれの階級の者が「新しい習慣の節制と家庭管理（エコノミー）」（*Hints* 17）を身につける良い機会であると明記し，どうしたらよいかをアドヴァイスしている。すなわち，上流階級の金持ちには，「贅沢」をやめて，「未来のチャリティのために定期的な資金」を蓄えるようにと薦め（21），中流階級の者には，上の階級の者たちを模倣し，金持ちになってからチャリティをしようと考えるのではなく，一部を貧者に施すようにと薦めた（22–23）。そして，貧者には，「金持ちや身分の高い人」の悪口を言わずに，教会へ行き，チャリティのおかげで安くなったパンを快く受け取るようにと助言した（25）。

『コテッジの料理人』では，ジョーンズ夫人のチャリティだけではなく，他の誰もが経済的（エコノミカル）である。ジョーンズ夫人は，自分のお金を使わずに，あるいは教区の共同大かまどを建てるための寄付金以外の誰のお金も使わずに，貧者を困窮から救済した。牛を飼って牛乳を廉価で貧者に販売した小売店主のスパーク夫人も損にならなくて，「チーズやバターを作ると同じだけのもうけがあった」（*Cottage* 12）。大かまどの建設に寄付金を出した金持ちもまた無駄な出費をしていない。それがわかるのは，労働者階級向けの『コテッジの料理人』が

1801年の『ハナ・モア全集』第4巻「中流階級の人々のための物語」に収められたとき，『憂鬱の治療—少ないお金で多くの善をなす方法の指南書』（*A Cure for Melancholy: Showing the Way to Do Much Good with Little Money*）とタイトルを変えた修正版においてである。加筆部分の一つでは，ジョーンズ夫人が共同かまどの建設のために寄付を募ったとき，郷士がそれに応じたのは「家庭管理（エコノミー）のあらゆる改善は救貧税を下げると思ったから」であると記されている（*Cure* 4: 347）。1794年から1801年の間に，小麦の値段と救貧税はともに上昇していたが（Nardin 277），貧者に自助を促すチャリティは与え手からすると結局負担が減少することになり，だからこそ持続可能なチャリティになると言えるだろう。

中流階級向けの『憂鬱の治療』では，『コテッジの料理人』の巻末のレシピと「役立つヒント」が削除されている。その代わりに文末に加筆された部分で，ジョーンズ夫人は，「神」によってもたらされた「異常な食糧難と苦悩」という試練は，金持ちを「実際の寄付」行為に駆り立てるだけではなく，「貧しい同胞のその地方特有の必要物を知ったり，彼らを救うことに興味を抱くようにした。改善された家庭管理法をする気にさせ，そしてもっと思いやりのこもった善行をさせるよう仕向けた」と総括した（*Cure* 4: 356）。結局，食糧難は，地位と食のヒエラルキーを維持したまま，彼女の言葉によれば，「文字通り富者と貧者を一堂に介させた」（4: 356），すなわちチャリティの与え手と受け手を一つの社会的エコシステムの中に収めたのである。

慈善施設のスープ

『コテッジの料理人』の巻末の「別のレシピ」に，スパーク夫人が店で売る安いスープのレシピが掲載されていたが，こうした店は当時スープ・ショップ（soup shop）と呼ばれ，貧者のための慈善施設の一つだった。

モアと関係が深い福音主義的慈善団体の『貧者の生活を改善し，その安楽を増進するための協会［貧者の生活改善協会］の報告書』（*The Reports of Society for Bettering the Condition and Increasing the Comforts of the Poor*）第一巻（1798）では，スープ・ショップについての報告が，スープのレシピとともに掲載されている。貧

者の生活改善協会の創立者であるトマス・バーナード（Thomas Bernard, 1750–1818）が開いたバーミンガム（Birmingham）で「パンと肉スープ」を提供する店（No. xxx）やロンドンのスピタルフィールズ（Spitalfields）で肉のスープとジャガイモを提供する店（No. xxxix）など男性が設立したスープ・ショップの他に，女性によるものもある。そのうちの一つ，事故で足を失った働き者の妻バーナード夫人（Mrs. Bernard）がバッキンガムシャー（Buckinghamshire）の村アイヴァー（Iver）で1796年10月に開いたスープ・ショップ（No. xviii）は，貧者の生活の維持を具体的に支援しただけではなく，店も少しもうけがあったので，「自分の生計所得に足して十分不自由なくやっていける額を受け取った」（*Reports* 143）という。モアのスパーク夫人のように決して金持ちではないバーナード夫人の無理のないチャリティの仕方は，当人の自立も約束しているのである。

バーナード夫人のスープのレシピは，エンドウ豆，ジャガイモ，ハーブ，塩こしょう，玉葱を5時間じっくり煮たものである（*Reports* 143）。彼女の話は，トリマーの『慈善施設の運営』（*The Œconomy of Charity*, 1789）の1801年に増補改訂された版（*OED*では，このeconomyの意味（I. 2. a）の例としてトリマーの1801年の同書のタイトルが載っている）の第二巻で，女性が貧者に対して行うチャリティの成功例の一つとして，抄録されている（Trimmer, *Œconomy* 2: 88–93）。その際トリマーは，「このスープは，［貧者の生活改善］協会が紙に印刷して配布した安い食べ物のためのレシピの一つで作られた」（2: 91）と注をつけている。

当時は，各種慈善団体も「スープ接待所」（soup house, soup kitchen）あるいは「安食堂」（eating house）と呼ばれる慈善施設で貧者のために廉価なスープを提供した。たとえば，ロンドンの「貧困工場労働者救済協会」（Society for the Relief of the Industrious Poor）が配布したちらし「善意と思いやりのある人々への呼びかけ」（"Address to the Benevolent and Humane,"［c. 1795］）では，この協会はこれまでスピタルフィールズ（絹商業が不景気になったことで有名な地区）に設けた「スープ接待所」で，「美味しくて栄養のある肉のスープ」を提供してきたが，そこに行けない遠方の者たちのために他の場所でも同様の施

設を開きたいため，「善意と思いやりのある人々」からの寄付をちらしに示す銀行や紳士方が受け付けていると，寄付金を募っている。

サマンサ・ウェブ（Samantha Webb）によれば，これらのスープ接待所で提供されたスープは，カフーンのレシピと同じものだったが（Webb 426），モアの貧者のためのレシピとも似ている。また，カフーンが，スープ接待所の主たる目的は貧者が「自分たちと家族を養うために，もっと良い，もっと安い，そしてもっと健康にいい自分たちの食べ物を用意する方法」（Colquhoun, *Account* 5）に馴れさせることであると述べているように，慈善施設のスープもモアのと同じく，貧者の食生活改善を目論んでいる。しかし，『報告書』やカフーンのパンフレットに掲載されたレシピはあくまでも慈善施設で提供するスープのものであって，モアのホワイト夫人やジョーンズ夫人のレシピのように貧者が自分の家で作ることを第一の目的にしたものではない。モアのチャリティは，貧者にスープを施すのではなく，レシピを教えて自分の家でそれを料理させて貧者の自助を促すという点で，慈善施設のチャリティとは大きな違いがある。

終わりに

それでは，チープ・レポジトリを通じて全国に広まった貧者のレシピによって，実際に貧者の家庭管理が改善され，彼らの困窮が和らぐ効果があったのだろうか。モアの伝記を書いたヘンリー・トムソン（Henry Thompson）によれば，『コテッジの料理人』のジョーンズ夫人はハナ・モア自身と似ている（Thompson 1: 172）。しかし，虚構のジョーンズ夫人と違って，現実のモアは，1795年12月7日のブーヴェリ夫人宛の手紙の中で，貧者の食糧難の原因を貧困労働者の低賃金や政府の囲い込み政策，さらに不当な買い占め転売に帰すなど，急進派に近い見方を示しながら，「しかし，これらの農業労働者たちはおとなしく我慢しています。彼らの二倍の賃金をもらっている熟練工たちが暴動を起こしているのに」と，地方の農民たちの苦境を訴えた（Chatterton 1: 295–96）。さらに1796年8月17日のブーヴェリ夫人宛の手紙では，次の収穫を期待しながらも，「専売権者，買い占め者，請負業者らの不正や金持ちの無関心は神の最も

情け深い恵み物をわざわざ破棄してしまうのではないかと懸念し」，そして「行政官や管理者たち」にモアがいくら「自分の目で見た悲惨さ」を訴えても貧者の救済に動いてくれないと嘆いている（Chatterton 1: 307–08）。モアは『豊かさへの道』や『コテッジの料理人』で，チャリティを与える側も受ける側も経済的であり健康的であり，また一つの共同体内の食の配分から見てエコロジカルでもあるチャリティのあり方を描いたが，現実にはそうした理想的共同体の実現までの道のりは厳しかったと言えよう。

＊本論は，名古屋大学英文学会第56回大会（於名古屋大学，2017年4月15日）において口頭発表したものに基づく。なお，本論はJSPS科研費15H03189，16H03396の助成を受けている。

引用文献

"Address to the Benevolent and Humane, for the Purpose of Extending the Laudable Intention of a Society, Instituted for the Relief of the Poor, by Supplying Them with Good and Nutritious Meat Soup." London, [c. 1795].

Board of Agriculture. "On the Present Scarcity of Provisions." *Annals of Agriculture, and Other Useful Arts*. Ed. Arthur Young. Vol. 24. London, 1795. 579–81.

Burke, Edmund. *Thoughts and Details on Scarcity, Originally Presented to The Right Hon. William Pitt, in the Month of November, 1795*. London, 1800.

———. *Reflections on the Revolution in France, and on the Proceedings in Certain Societies in London Relative to that Event*. 2nd ed. London, 1790.

Chatterton, Lady Georgiana, ed. *Memorials, Personal and Historical of Admiral Lord Gambier, G. C. B. With Original Letters from William Pitt First Lord Chatham, Lord Nelson, Lord Castlereagh, Lord Mulgrave, Henry Fox First Lord Holland, The Right Hon. George Canning, Etc.* 2nd ed. 2 vols. London, 1861.

[Colquhoun, Patrick.] *An Account of a Meat and Soup Charity, Established in the Metropolis, in the year 1797*. By a Magistrate. London, 1797.

[———.] *Useful Suggestions Favourable to the Comforts of Labouring People and to Decent Housekeepers*. London, 1795.

Comitini, Patricia. *Vocational Philanthropy and British Women's Writing, 1790–1810: Wollstonecraft, More, Edgeworth, Wordsworth.* Aldershot: Ashgate, 2005.

Darwin, Erasmus. *Zoonomia; or, The Laws of Organic Life.* 2 vols. London, 1794–96.

Elliot, Dorice. " 'The Care of the Poor is her Profession': Hannah More and Women's Philanthropic Work." *Nineteenth-Century Contexts* 19 (1995): 179–204.

Frend, William. *Scarcity of Bread. A Plan for Reducing the High Price of This Article, in a Letter Addressed by William Frend, to William Devaynes, Esq.* London, 1795.

Gillray, James. *The British Butcher, Supplying John Bull with a Substitute for Bread.* 6 July 1795. Etching. The British Museum, London. Collection Online. Web. 5 Feb. 2017.

———. *French Liberty. British Slavery.* 1792. Etching. The British Museum, London. Collection Online. Web. 18 Dec. 2013.

———. *Substitutes for Bread; -or- Right Honorables, Saving the Loaves, & Dividing the Fishes.* 24 Dec. 1795. Etching. The British Museum, London. Collection Online. Web. 5 Feb. 2017.

[Malthus, Thomas Robert.] *An Essay on the Principle of Population, As It Affects the Future Improvement of Society.* London, 1798.

More, Hannah. *The Cottage Cook; or, Mrs. Jones's Cheap Dishes; Shewing the Way to Do Much Good with Little Money.* London, [c. 1795].

———. *A Cure for Melancholy: Shewing the Way to Do Much Good with Little Money. The Works of Hannah More.* 8 vols. London, 1801. 4: 325–57.

———. *Hints to All Ranks of People, on the Occasion of the Present Scarcity.* Bath and London, 1795.

———. *The Riot; or, Half a Loaf is Better than No Bread.* London and Bath, 1795.

———. *Village Politics: Addressed to All the Mechanics, Journeymen, and Day Labourers, in Great Britain.* By Will Chip. 1792. 2nd ed. London, 1793.

———. *The Way to Plenty: or, The Second Part of Tom White.* London and Bath, [1795].

Nardin, Jane. "Hannah More and the Problem of Poverty." *Texas Studies in Literature and Languages* 43.3 (2001): 267–84.

Paley, William. *The Principles of Moral and Political Philosophy.* 2 vols. Dublin, 1785.

Poynter, J. R. *Society and Pauperism: English Ideas on Poor Relief, 1795–1834.* London: Routledge, 1969.

The Reports of the Society for Bettering the Condition and Increasing the Comforts of the Poor. Vol. 1. London, 1798.

Rights of Swine. An Address to the Poor. Re-printed 1794. By A Friend of the Poor. [London], 1794.

The Rights of Swine. An Address to the Poor. London, [c. 1795].

Roberts, William. *Memoirs of The Life and Correspondence of Mrs. Hannah More.* 2 vols. New York, 1834.

Saunders, Julia. "Putting the Reader Right: Reassessing Hannah More's *Cheap Repository Tracts.*" *Romanticism on the Net* 16 (November 1999). Web. 4 March 2017.

Shelley, Percy Bysshe. *A Vindication of Natural Diet.* 1813. London, 1884.

Stuart, Tristram. *The Bloodless Revolution: A Cultural History of Vegetarianism from 1600 to Modern Times.* New York: Norton, 2007.

Teuteberg, Hans Jurgen, and Jean-Louis Flandrin. "The Transformation of the European Diet." *Food: A Culinary History.* Ed. Jean-Louis Flandrin and Massimo Montanari. Trans. Albert Sonnenfeld. New York: Columbia UP, 1999. 442–56.

Trimmer, Sarah. *The Œconomy of Charity; or, An Address to Ladies; Adapted to the Present State of Charitable Institutions in England.* 2 vols. London, 1801.

———. *Fabulous Histories. Designed for the Instruction of Children, Respecting Their Treatment of Animals.* London, 1786.

Webb, Samantha. "One Man's Trash Is Another Man's Dinner: Food and the Poetics of Scarcity in the Cheap Repository Tract." *European Romantic Review* 17.4 (2006): 419–36.

Wells, Roger. *Wretched Face: Famine in Wartime England 1793–1801.* New York: St. Martin's, 1988.

Synopsis

Recipes for the Poor: Hannah More, Charity, Environment
Masae Kawatsu

A severe cold winter between 1794 and 1795 in Britain was followed by a serious scarcity of food. In order to relieve the poor from starvation, the evangelical philanthropist Hannah More advocated cheap, tasty, and nutritious recipes for the poor in Cheap Repository Tracts. This essay examines More's charity and the social, economical, and environmental significance of her recipes.

The 1795 scarcity of food arose during the war against France, and there were different opinions on its causes and solutions. The radicals considered the scarcity to be the result of social, political and economical factors such as the enclosure, the war, high grain prices, and high taxes. The radicals demanded food for the poor as well as their social and political rights. Fearing riots, the government announced to the people that the scarcity was caused by a crop failure due to bad weather and presented a temporary alternative food plan of mixed bread in place of white bread until the next harvest would come. The conservative Edmund Burke, however, was opposed to the government's plan, claiming that the scarcity is "Divine Providence" and that "the laws of commerce" operate as "the laws of nature" or "the laws of God"; therefore, there is no solution but waiting for good weather.

More has generally been portrayed as a conservative writer in contrast to the radical Mary Wollstonecraft. But More's opinions of the scarcity demonstrate politically ambiguous facets. In a ballad *The Riot; or, Half a Loaf is Better than No Bread* (1795), she articulated a position closer to the government. When Tom says "I'm hungry ... but I've little to eat" and tries to incite village people to riot, Jack persuades Tom away from rioting, insisting that the scarcity is not caused by the war and high taxes, but by the weather or God. Therefore, what the poor can resort to is resignation,

labor, and dependence on charity. *The Riot* is said to have prevented an actual riot in Bath.

However, More did not consider the weather or God as the only causes of the scarcity. In her letter of August 24, 1795, she attributed the hardship of the poor to their own want of "economy" (in the sense of I. 1. a. in *OED*: the art of managing a household, *esp*. with regard to household expenses). Like Burke's laissez-faire policy, this may sound coldhearted to the poor. Unlike Burke, however, More tried to relieve the poor by instructing them in good household management. This reflects the transition from paternalistic charity to a charity of "self-help." In *The Way to Plenty* published in September 1795, the middle-class charitable Mr. and Mrs. White are examples of good management. Their management is not only economical but also ecological. Mr. White allows his poor laborers to plant potatoes in his uncultivated "head lands" and parts with his dogs so as to keep their food (meat) for the poor. On the other hand, Mrs. White does not bake but boils meat because "the pot-liquor" makes "such a supply of broth for the sick poor." In order to show the poor parish women how to manage a household and get through the scarcity, she introduces cheap recipes which do not require any bread nor flour, such as pea and vegetable soups, rice milk and rice pudding. Wealthy persons also support Mrs. White's charity by making a contribution of rice or by buying high-class and expensive meat and never buying up all the "course pieces" for gravy so that the poor could buy some. The parish in *The Way to Plenty* is thus constructed as a kind of ecosystem, a biotic community in conjunction with the environment without any waste (garbage, leftovers, trash): a community in which limited food is distributed to humans as well as to animals, according to the priority order of a natural and social hierarchy of being, with the exception of those who rebel against the hierarchy. To our modern senses, it may sound like anything but charity that the poor are given wastes of the rich's dishes, but More thought it was necessary for the maintenance of a social hierarchy.

The Cottage Cook published (probably after the harvest) in 1795 has an intertextual relation to *The Way to Plenty*. Mrs. Jones, who is often said to resemble More herself, introduces Mrs. White's recipes and her own as well to poor girls at the parish school, hoping that they would cook such cheap dishes at home and become good wives with "good management." No one who is charitable to the poor in this Tract story, from Mrs. Jones, loses money. As *A Cure for Melancholy* (1801), a revised version of *The Cottage Cook*, shows, even the Squire who donated money for the parish oven with which the poor could bake bread themselves, did not lose in the long run, because the poor's "improvement in œconomy would reduce the poor's rate."

More's recipes for the poor were widespread as a large quantity of Cheap Repository Tracts were distributed all over the country. However, it seems doubtful whether these recipes were effective to improve the poor's household management and to relieve them from hunger. In her letters of December 1795 and August 1796, More, like the radicals, blamed low wages, the enclosure, and profiteering as the causes of scarcity, and also lamented the indifference and inaction of the authorities and rich people towards the poor.